

058

職員手記 Ⅱ

～KOTOBA～

当時勤務した職員たちの言葉

4 総務班 消防司令補 石田 将臣
月14日の前震時及び4月16日の本震時は、病院に入院中でした。病棟の6階ということもあり、かつて地震コーナーで体験した震度6など比較にならない振り子のように激しい揺れで、特に本震時には壁面の亀裂、家具の転倒、ガラス破損が多数見受けられ、近隣の学校の体育館に緊急避難しました。一避難者として地震の恐ろしさを痛感しました。

こ 総務班 消防士長 宮原 禮二
これまで様々な災害を経験し対応してきたが、まさか自分の住む地域が！しかしさすがは消防、脈々と受け継がれた精神と郷土愛で乗り越えた、all益城西原、all熊本、all消防！天晴である。

前 予防班 消防司令補 瀧川 史郎
震発生直後から約一ヶ月間昼間問わず消防の使命を全うしました。何よりも感謝していることは、私が不在中、妻は不安と恐怖を感じ続けながら、地域リーダーとなり奮闘したと近所の方に聞いたことでした。ありがとう。

ま 予防班 消防士長 上田 浩文
さに「恐怖」を感じた瞬間だった。その後、余震の続く日々においては危険の中で職務遂行しているのは、我々消防や警察だけではなく、ライフラインの応急復旧に多くの職業の方が奮闘していることを実感し、人間の強さを知った。

熊 警防班 消防司令 福島 信二
本地震を経験し、改めて自然災害の恐ろしさと誰もが遭遇する可能性を秘めていることを思い知ると共に、大災害には「想定外」にも対応できる適応力、想像力と団結力が必要であると痛感した。この難局を一致団結して乗り越えたことに誇りを持ちたい。

熊 警防班 消防士長 内村 兼次
本地震、今も消えない傷跡、益城西原署の絆の強さを一生忘れない。

勤 警防班 消防士長 竹原 圭祐
務中、突然の大きな揺れ。震源地、被害状況等何の情報もない中、火災出場。通り慣れた道も道路陥没、瓦礫等で通行不可、消火栓も断水。次々に付近住民からの救助要請。緊急地震通報が鳴り響き、震度5～6が続く中での救助活動。一夜明け、町並みの変わりように愕然とした。今でも夢のような出来事でした。

小 警防班 消防副士長 田上 翔太
学校から住んでいる地元、益城町を震源に震度7の地震が発生した。信じられなかった。夢であってほしいと思った。家族の安否確認も取れないまま安永の火災現場に出場した。消防署も被災したため、水道は使えず、トイレや風呂も使えなかった。日本全国、様々な仕事の方々からの温かい支援を肌で感じた。

ま 警防班 消防司令補 日置 啓一
さかの熊本地震、14日深夜からの活動、記憶と時間の感覚が狂っているように感じました。また、地元消防団との連携は改めて必要だと感じた。

平 警防班 消防士長 古庄 竜二
成28年4月14日21時26分熊本地震の前震が発生。勤務中だったため、まず先に家族の心配をしました。家族とは連絡が取れないまま、災害に出場し現場対応に当たりました。隊員を負傷させることなく現場活動を終了することができ、次の日の朝を迎えました。災害対応もやっと落ちついたところに家族全員の無事を確認することができました。熊本地震は不安と恐怖と心配の日々でした。

西 警防班 消防士長 永田 収
原出張所に助けを求める住民が多数来られたが別の事案に対応するために断らないといけないものどかしい気持ちは一生忘れません。

4 警防班 消防士長 北村 公志
月14日に発生した前震、まさに益城町の救急現場で活動中であった。あの建物内で感じたものすごい揺れ、建物が崩壊していく音は今でも耳に残っている。様々な災害へ出場し活動した数日間は、一生忘れることのない現場活動となった。

い 警防班 消防士長 陳田 真一
つでもどこでも、そして誰にでも起こり得る災害。この体験は決して他人事ではないのです。全ての人にぜひ役立ててほしい。

死 警防班 消防士長 清水 健太
を幾度となく意識した人生唯一の経験だった。個の人間力と日本消防のつながりの強靱さに圧倒され、自らも消防士である事に対し誇りを持つようになった。

地 警防班 消防副士長 安田 博
元でまさかの大地震。家族、知人の安否を確認しながらの活動であったため、不安感いっぱい活動していた。生まれ育った地元の変貌ぶりは今でも脳裏に焼き付いている。熊本でも地震が起きる事を予想していなかったため、地震に対する予防や対策ができていなかった。地震などの災害はいつ何ときでも起こるため、対応できる準備や訓練を積み重ねなければならないと思った。

4 西原出張所 消防司令補 吉山 潤
月14日のあの夜。地面からドン！と伝わる縦揺れと横揺れ、数秒間何が起きたかわからなかった。携帯の地震アラームで震度7の地震であると確信。まだ体に染みついて離れない地震の揺れ、非現実的に感じられたあの震災の日々。震災から時は流れ、解体によって更地になった土地、変わり果てた町を見ると悲しい気持ちになる。まだ手つかずの倒壊家屋や崩れた土地、熊本地震の恐ろしさは今でも忘れない。災害を止めることはできないかもしれないが、その時どうすることが最善なのかと込み上げてくる思いを抑えながら正解はないとわかっているが今でも自分に問う時がある。

西原出張所 消防士長 小野川 強
原出張所にて勤務中に起きた熊本地震。災害発生現場にポンプ車で出場途上「助けてください！」と数人の災害弱者に呼び止められた。聞くと瓦礫の下に家族が残っているとのこと。「119番通報してください。」と言い残しその場を立ち去ったが、胸が痛かった。これが本当に現実で起こっていることなのかと信じられなかった。この熊本地震について、大災害に対して消防力の弱さを痛感した。この経験は決して無駄ではないということ、また消防団及び自主防災クラブの大切さを感じた。

非 西原出張所 消防士長 杉野 隆大
番日の夜、自宅で大きな揺れと共に家族の悲鳴が聴こえた。鳴り止まない緊急地震アラームと続く揺れの中、妻と二人の子供を屋外に出すと周囲には倒壊した家屋と瓦礫の光景。道は塞がれ抜け道を探し走って消防署に向かうがその間何度か負傷した住民と遭遇した。簡単な処置を行い全てには応じられない無力さを感じながらやっとの事で消防署に到着。管轄の消防、住民、家族などの全てが被災した有事の状況下、何を優先し何が正しいのか判断し行動する事がどんなに難しい事か、それを身を以て感じた。

過 警防班 消防司令 岩木 利仁
去に経験したことの無い大きな揺れだった。今回の熊本地震で自然の怖さを改めて実感した。人は自然の中で生かされており、自然とうまく共存しなければならない。地震による家屋倒壊現場などで益城西原署の一員として同僚と共に全力で活動してきた日々は私の人生の中で決して忘れることの無い出来事であり、しっかりと後世に残していきたい。

今 警防班 消防士長 坂本 光平
回の地震を経験して、自分の無力さ及び甘さを痛感した。同時に家族、仲間の大切さを身にしみて感じた。

ま 警防班 消防士長 山村 翼
さか自分が住んでいる熊本で大地震が起こるなんて……。この体験を通じて感じたこと、学んだことを今後の大災害に生かせるよう頑張っていきたいと思う。

な 警防班 消防司令補 山本 祥也
ぜだ！緊急消防援助隊有効活用できず、各小隊単独での活動となり小隊長としての判断力と決断力が重要。まだ助けられた命があったはず。

1 警防班 消防士長 東田 雄一郎
4日の前震、16日の本震と2回の大地震が起き、益城町と西原村を始め熊本県内に大きな被害、また多くの尊い命が失われた。しかし、失ったものばかりではなく、その中で得たものもあると思う。それは、県外から多くの支援など人と人とのつながりの大切さである。改めて、周りの暖かさに感謝したい。

4 警防班 消防士長 今村 貴志
月14日の前震から想定外の連続で、目の前の状況を把握することはいっぱいであった。今回発生した熊本地震の教訓を、今後も起こりうるであろう大規模災害に生かしていきたい。

い 警防班 消防副士長 志賀 裕
つか来ると言われてきた地震……。実際に私たちの身近なところで起きるとは。しかし、この地震を通して、たくさんの方々が災害に対する備えをしなければならないと考えたと思う。私としては、この経験を生かし、今後も起こりうるであろう災害に備え、少しでも人的・物的被害が軽減するように貢献していきたい。

地 警防班 消防士長 古閑 一郎
震・雷・火事・おやじ、地震は本当に恐ろしいものだった。一日も早い熊本の復興と平穏な日常を取り戻すために「頑張ろう！熊本！」

現 警防班 消防副士長 北谷 聡嗣
場活動中に本震が発生。「家族は無事なのか…。電話も繋がらない本震直後のさなか不安な気持ちで活動していたあの日々は今でも脳裏に焼き付いている。震災を経験して日頃の災害に対する備え、そして消防と地域の繋がりが非常に大切であるということを思い知らされた。

震 警防課 消防士 森 賢太郎
度7の大地震。もう来ない、そう思ったときに命取り。この災害を生涯忘れることなく、自分の消防人生に活かしたい。

4 西原出張所 消防司令補 松下 和久
0年以上生きてきたがまさか、生きている間にこれほどの地震を経験するとは夢にも思わなかった。世の中何が起こるかわからない、「備えあれば憂いなし」

私 西原出張所 消防士長 丹生 幸輝
が生きている数十年の間に、数百年に一度とも言われる布田川・日奈久断層に起因する地震が発生し、乗り越えられた事は、ある意味光栄である。

4 西原出張所 消防士長 西岡 治彦
月14日、4月16日と2回の震度7、ドラマや映画のワンシーンのような映像が脳裏に焼きついてはならない。恐怖と使命感が交差する中、勤務したのを鮮明に覚えている。地震が発生していない時でさえ地面が揺れているような錯覚。遅れて鳴る地震アラームと数え切れないほどの余震、そして睡眠もとらず疲労が溜まっているはずなのに疲労を感じない体と精神状態、明らかに色々な感覚が麻痺していた。帰宅後、家族の姿を目にすると涙がこぼれ、家族を抱きしめた時足が震えていたのを今でも忘れない。

非 西原出張所 消防士長 片山 誠也
番日に前震を自宅で、本震を職場で経験し不安と恐怖の連続だった。初めて本物の恐怖に直面した瞬間でもあった。この経験は今後おこるかもしれない災害のためにも広く伝える必要があると痛感した。

熊 西原出張所 消防士 光永 翔太
本地震、初めての震度7の経験、忘れられない忘れない。